

「紗智を取り戻して、帝国の目が届かない所まで逃げられたら、おまえはオレの機能を停止して処分していい」

「……なぜ今そんなことを言うんだい？」

「前から考えていた……おまえにはその資格がある。紗智が戻ってくればオレの役目は終わりだ」

重い沈黙に支配される。しかしこの状況から逃れられない。

無人島で何度目かの遭難をした終焉は三日ほど経過した頃、眠りに落ちたのか意識を失ったのか……気が付いた時にはコールドに背負われて山を降りていた。

動く力は残っていない、しゃべるのがやっとだった。

最初は地理に強い天が搜索に向かおうとしていたことや、ミイラ取りがミイラになっては困るから頑丈な自分とコールドがその役を買って出たこと、そんな話をぼつぼつとしていた矢先に突然の発言だ。

言葉を探そうとするが、体が重い。力が出ない。頭も回らない。意識を保とうと顔を上げると、一歩踏み出すごとに頬をかすめる淡い緑の髪が美しかった。新品の人形のようにまっすぐに光を弾く。どこかの元科学研究所副長が手入れを欠かさないのでろう。

「仮にそうしたいと思って、実際にしたら天は悲しむだろうね」

か？ 天は一番面倒を見てくれた。それから……ジスロフも怪生物の開発に熱心でよく研究所に顔を見せていた……

「天は初めての人型怪生物担当になったって張り切っていたなあ。ジスロフは、直接育てはしないけれど働いて養育費を賄う親みたいなものか」

「ジスロフの指示がなければオレは存在していなかっただろうが……裏切られた」

「向こうはそうは思っていないだろうね、これっぽっちも」

「ああ……分かってる。だからオレはすぐに天について行くことを決めた」

「そういえば天もジスロフの後だったね。今は離縁されているかもしれないけど、法の上じゃ立派に家族だ」

「あれは勝手にされたことだ」

「おや、機嫌が悪いね。怒っているのかい？」

「別に……っ、しつかりつかまってる」

段差を軽々と飛び降りる。怪生物の身体能力は本当に素晴らしい。

恐らくコールドの中に、ジスロフへの嫉妬があったのだろう。

終焉もかつては嫉妬が胸の内を渦巻いていた。紗智と結ばれた輪廻へ。輪廻と結ばれた紗智へ。

「オレはただの人造生物だ」

コールドは淡々と否定する。

「友達思いなんだな……」

黙していると言葉は続く。

「人間は家族が大事なんだろう。友達とどちらがより大事なんだ」

「それを言ったら、天の行動にはどう説明をつけるんだい？」

コールドは表情を若干強張らせたようだ。よくは見えないかったが、そんな心配がした。

「どっちも大事だし、どちらかは人によるよ」

背中から落ちないように腕に力を込め直す。

「でも今は、生きてる奴を優先したい」

「そうか……」

またの沈黙の中、見知った道に入って安堵感が増していく。

「オレには家族がない、理解が及ばない。すまない……」

「確かにキミに血の繋がった家族はいないけれど、天は家族のようなものじゃないかい？」

「そんなふうに考えるのか？」

「生きているからね」

「なら、オレを造ったハルや研究所の職員たちもそうなの

まだ十代半ば、周りの連中は遊んでいるような年頃に輪廻は早々に結婚を決めた。紗智を特別に思っていた終焉は一時失意に陥ったが、他ならぬ輪廻廻さんならばと受け入れられた。

他の誰にもとられることは許せなかった。まさか輪廻まで失うことになるとは——

コールドの罪悪感の理解しているが、終焉の気持ちを慮っているのだろうが、そのために目的を見誤ることはあってはならない。

「人間たちは複雑だ。オレまで……ジスロフのことを完全に割り切れていない……」

声音から伝わってくるものは、苛立ちというよりもやるせなさの方がふさわしかった。

この島に来て以来、彼自身の今までを振り返り、ナナの存在にも強く影響を受けているのだ。終焉にはそう見える。

「ハハッ、すっかり人間臭くなったね。今の話を全部天に聞かせてやるかい」

「こんなこと言えるかよ……」

気まずそうに顔をそらす。

天相手だからこそ、思っても言いづらいことはあるのだろう。

「それで、俺に甘えてこんな話をしているのかい？」

「動けも帰れもしなくなっていた奴なんか甘えるか。オレは救助に来ただけだ」

「ああ、とても助かっているよ。また一つ借りができたね」

「借りだとか、そんなこと考える必要はない」

もしコールドが助けに来て、時既に遅しだったら……彼はどんな思いを抱えただろう。

自然に会話が途切れて、通い慣れた林の中をおぶられたまま黙々と進んだ。

鳥のさえずりや温かな風に、次第に眠気に誘われる。

動きの鈍くなった口を開き、緩慢に声を出す。

「さっきのこと、すべてが終わったら、その時になったら考えるよ。それまで生きていられればね……」

二人でいる今のうちに言っておきたかったのだ。はぐらかしたままにしてくれない、そんな気分だった。最後の一言は余計だっただろうか。弱気に過ぎるかも知れないが、遭難で疲弊しきっていたせいなのだろうということにして、言い逃げるように瞼を閉じた。

E D N



ご感想をいただけますと幸いです
拍手&フォーム
<http://rem-hz.fem.jp/clap0.htm>

奥付

アンディーメンテウェブオンリー&
自給自足 20 周年記念 SS 本

2022 年 7 月 16 日発行

サークル REM

発行者 R

連絡先 @1_Hz

<http://rem-hz.fem.jp/>